

19 空腸原発腺扁平上皮癌の1例

宗岡 悠介・新国 恵也・河内 保之
西村 淳・牧野 成人・川原聖佳子
北見 智恵・中野 雅人・堀田慎之介
富所 隆*・渡邊ゆかり*

長岡中央総合病院 外科
同 内科*

症例は53歳，女性。

【既往歴】帯状疱疹，妊娠高血圧症候群。

【現病歴】2010年12月より立ちくらみ，労作時息切れを自覚し，2011年1月近医受診。血液検査で貧血を指摘されるも，鉄剤の内服で改善し，精査されていなかった。2011年7月上旬より上記症状が再燃し，7月中旬当院総合診療科受診。血液検査でHb 3.3g/dlと著明な貧血と腹部CTで上部空腸に8.5cm大の境界不明瞭，一部臍への浸潤を疑わせる腫瘤を認め，消化器内科入院となった。入院後カプセル内視鏡検査および小腸内視鏡検査を施行し，生検の結果上部空腸癌と診断した。8月上旬，空腸・十二指腸・横行結腸，臍鉤部部分切除十傍大動脈リンパ節郭清を施行。病理組織学的診断はadenosquamous carcinoma (tub1 ≥ tub2, por1, SCC-well), type3, pSI (腸間膜・十二指腸・臍・結腸間膜・横行結腸), ly1, v2, リンパ節転移陽性(5/20)であり，原発性空腸腺扁平上皮癌 pT4N2M1 pStage IV (UICC) の診断となった。術後CDDP + S1による補助化学療法を施行している。

【考察】原発性小腸癌は発生頻度が低く，その組織型のほとんどが中～高分化型腺癌である。本症例のような小腸原発の腺扁平上皮癌の報告は極めて少なく，貴重な症例であると思われたので報告する。

20 化学療法中に肺結核が再燃した直腸癌多発肝転移の1例

八木 寛・角南 栄二・黒崎 功*
畠山 勝義*

白根健生病院 外科
新潟大学大学院 消化器・一般外科分野*

症例は80才，男性。

【既往歴】20才時肋膜炎にて入院治療歴があるが詳細不明。

【現病歴】進行下部直腸癌にて2009年8月下旬マイルス手術施行。術後補助化学療法としてIFLを施行した。術後6ヶ月の2010(H22)2月多発肝転移を認め，Bevacitumab + mFOLFOX6を開始。画像上肝転移は痕跡程度となりPRと判定したが，9コース施行後の2010(H22)10月CTにて肺炎を認め，喀痰PCRにて結核菌を指摘された。ガフキー検査，喀痰培養，ツ反はいずれも陰性であった。排菌はないものの過去の結核感染の再燃と考えBevacitumab + mFOLFOX6を中止した上で3剤併用抗結核療法を開始した。多発肝転移が増悪しながら肝転移出現後1年4ヶ月原病死となった。

21 在宅緩和ケアを併施した緩和化学療法が奏効した，腹膜播腫を伴う進行胃癌の1例

角南 栄二・八木 寛・黒崎 功*
畠山 勝義*

白根健生病院 外科
新潟大学大学院 消化器・一般外科分野*

症例は83才，男性。

【現病歴】2009(H21)1月中旬胃体中部進行胃癌および腹膜播腫と診断，手術適応はなく全身化学療法の適応と考え同1月下旬よりTS-1/CDDP併用化学療法を開始した。化学療法が奏効し1コース終了後より歩行可能となったため，本人および家族の強い希望にて在宅緩和ケアをしながら緩和化学療法を継続し，CDDP点滴時のみ外来通院とした。2コース終了時のGTFで原発